

# 基督の創出

——「邪教案」にみるキリスト教系異端結社

孫 江

はじめに

- 一、源と流——呼喊派の流域
  - 二、新教派の現出——いくつかの事例を通して
  - 三、連続性と変化——初歩的観察
- 結び

## はじめに

中国では、二〇世紀七〇年代末以降、社会に対する政治のコントロールが弱まるにつれ、長い間「地下」の世界に隠れていたキリスト教系の宗教結社——「邪教」や「迷信」と呼ばれた宗教結社——が新たに発展する空間を得た。農業生産に従事しない農村出身の教主はキリスト教の教義を旗印に、いくつかのキリスト教新教派 (sect) を創設した。これとほぼ同時に、海外のキリスト教団体も密かに中国大陸に入って布教活動を開始した。現代中国の民間キリスト教結社は主として次の二つに分類することができる。すなわち、呼喊派のような歴史上のキリスト教教派を基礎とした結社と、霊霊教、門徒会、および海外から入ってきた越境する教派 (transnational sect) のような結社である。これらのキリスト教系の宗教結社は農村地域を中心に活動を展開し、一定数の信者を擁した。中国各地の地方政府はこれらの結社を「邪教」と見なし、厳しい取締や弾圧を行ってきた。

一九七〇年代以降のキリスト教系宗教結社の活動について、これまでにほとんど研究がなされていない。本文では、いくつか「邪教案」に関するテキストを素材に、宗教社会学の観点から異端結社としてのキリスト教系宗教結社による「基督の創出」を考察する。

## 一、源と流——呼喊派の流域

呼喊派と呼ばれる宗教結社はキリスト教系宗教結社のなかで最も大きな影響を有する。この教派の歴史は一九二〇年代に出現した基督徒聚会処に遡ることができる。

基督徒聚会処は一九二二年倪柝声によって設立された。倪は一九〇三年に福州のクリスチャンの家に生まれ、一九二一年、イギリスで「兄弟会」の女性宣教師バーバー（M. E. Barber）から洗礼を受けた。バーバーはもともと聖公会の信者であったが、後に「兄弟会」の無教会主義の教義を受け入れた。一九二二年夏、倪はで無教会の基督徒聚会処の成立を宣言し、翌年に『復興報』を創刊した。

基督徒聚会処はキリスト教のどの宗派にも属さず、各地の教会が互いに独立して存在する。教会に長老、執事がおかれ、信者は互いに兄弟姉妹と称し、非定期的に集会を開き、毎週日曜日に礼拝を行う。儀式より信仰を重んじ、クリスマスや復活祭など、聖書に記載されていない祝日を無視する。信者が入会する際に全身を水に浸し、集会所には十字架やキリストの像を掛けない。礼拝の時に女性は頭巾をかぶる。基督徒聚会処のこうした特徴は、後にそのほぼすべてが呼喊派に受け継がれた。

呼喊派の創立者である李常受は山東省蓬莱県の出身で、一九三二年に烟台で基督徒聚会処に加入した後、華北、東北地域の基督徒聚会処の責任者となった。第二次世界大戦後、李は上海に赴き、反共産党の宣伝を行った。国民党が大陸から台湾へ撤退すると、李は一部の信者を率いて台湾に移り、以降、台湾、香港、東南アジア地域で布教活動を行った。一九五八年、李は基督徒聚会処の教義を改革し、「主キリストは父でもあり、子でもあり、霊でもある」というキリスト教の教えが邪説であると攻撃した。一九六二年、李は北米に移住し、カリフォルニア南部を中心に布教活動を展開した。一九六七年以降、李は、道の時代がすでに終わり、現在は道の時代から霊の時代に入った、主の名前を「呼喊」（大声で呼ぶ）することが霊を解放する唯一の方法であると主張した。これが「呼喊派」という名前の由来である。一九九七年、李常受はアメリカで病死した。この時、呼喊派が中国大陸で活動を開始してから十八年の歳月が経っていた。

## 1、呼喊派

呼喊派は一九七九年に中国大陸に入り、福建、浙江、河南の三省で教会を設立した。その後、基督徒聚会処の信者の支援を得て、呼喊派は各地で急速に勢力を拡大し、一九八三年には、二十以上の省、自治区、直轄市で数万人の信者を得た。呼喊派は各地で「地方教会」や「常受教」などと呼ばれ、中国政府による宗教結社取締の主な対象となった。

呼喊派は主として三十～五十人規模の家庭集会の形で活動するが、その組織形態は地域によって一様ではない。たとえば、安徽省において、呼喊派の組織は四つのレベルに分けられ、省レベルの組織は「衆教会」と呼ばれ、県レベルの組織は「教会」(または「城」)と呼ばれる。その下には「家」もしくは「分家」があり、家の下には十二人以下の「小排」がある。「家」より上の責任者は「負担」と呼ばれ、「負担」の下には「配搭」と呼ばれる助手がいる。両者の関係は「同工」と称され、信者同士は兄弟姉妹と呼び合う。

基督徒聚会処の支持を得たことの他に、呼喊派が比較的早い時期に中国に入り、各地のキリスト教信者を教会に取り入れたことも、呼喊派が急速に発展した原因と見られる。聖書の内容について、呼喊派は中国政府が公認したキリスト教の解釈と異なる解釈を行った。具体的に、呼喊派は聖父、聖子、聖霊の「三位一体」を「一位三形」と解釈した。それによれば、「子は父の化身であり、霊は子の化身であり、父・子・霊が一体である」。呼喊派は信者に対し、「聖書の一字一句の教えに従うのではなく、生きた基督に従うべし」といい、聖書の教えに固執しないことを強調した。呼喊派はキリストへの祈りを「呼喊」と解釈し、「主の名を大声で叫べば、聖霊がやってくる」、「何度も大声で主の名を叫べば、霊を充満させ、解放することができる」という。一九九一年六月四日、香港キリスト教会が「香港教会長老同工一同」の名義で声明を発表し、各地の信者から寄せられた情報に基づいて、李常受に対して個人崇拜を行っていることを批判した。それによれば、呼喊派信者の間では、「キリストは老いた。(キリストは)権力を李常受に与えた」。「エホバは聖父、キリストは聖子、聖霊は常受、常受はキリストの後継者だ」などと言い伝えられているという。香港キリスト教会の声明では、「われわれはこれらの教えが悪魔の道理であると罪を

言い渡し、イエス・キリストの名でこれらの異端邪説を激しく責める」と述べられている。

呼喊派はキリスト教内部から派生した異端結社として、中国政府公認のキリスト教「三自」（「自治」、「自伝」、「自養」）教会を、共産党が宗教をコントロールし、最終的に宗教を消滅させるための道具に過ぎなかったと批判した。それによれば、「（われわれの）教会の前には三つの大きな敵がいる。すなわち三自会、共産党、人民政府である」。呼喊派は「昼も夜もびくびくして落ち着かないほどキリスト教をかき乱そう」、人類がすでに末日に近づき、「主イエスはまもなくやってくる。世界はまもなく壊滅する。耕作をやめなさい。家を建てるのもやめなさい。結婚もやめなさい」と呼びかけ、その信者が「三自」教会を包囲・攻撃する事件も起きた。

中国大陸で活動する十八年の間、呼喊派の勢力は全国二十あまりの省や市に広がった。一九九三年一月二九日、安徽省霍邱県の呼喊派信者周某が七十人ほどの信者を集めて、三昼夜連続して「昇天」と呼ばれる集会を行ったところ、警察との間で衝突が起きた。政府の取締が強まるにつれて、呼喊派は秘密活動に転じざるをえなかった。

## 2、被立王

呼喊派がキリスト教信者を教会に取り入れることによって急速に勢力を拡大していく一方で、その信者たちが民間信仰に関する知識に基づいて呼喊派を改造することもあった。「被立王」と呼ばれるキリスト教系宗教結社がその典型的な事例である。

「被立王」教派の創立者呉揚明は一九四四年に安徽省潁上県で生まれた農民で、小学校で三年間しか教育を受けなかった。しかし故郷の辺鄙な村では、呉は比較的教育のある人間で、人民公社の時期には生産隊の隊長をつとめた。一九七〇年代末に改革・開放が始まると、安徽省でいち早く生産請負制が実施された。呉揚明は生産隊長から普通の農民に戻った。一九七九年、呉はキリスト教の信者となり、一九八三年、彼は隣の河南省固始県で呼喊派が盛んに活動しているという話を聞いて、兄の呉月明と一緒に自転車で固始県に行き、呼喊派の集会に参加し、呼喊派に入信した。その後まもなく呉は呼喊派の幹部となった。同年一〇月、固始県で呼喊派

## 基督の創出

に対する取締が始まり、呉は何度か公安機関で尋問を受けた。一九八七年一月三日、呉は「反革命宣伝」の罪で懲役一年、三年間市民権剥奪の判決を言い渡された。刑期を終えて釈放された後も、彼が引き続き布教活動を行ったため、三年間の強制労働をさせられた。一九九〇年一月、呉は一時帰宅と言って暇をとって教養所を離れ、二度と戻らなかった。

「被立王」という名は中国語訳新約聖書「ルカ福音書」のなかの「被立」という語に由来した。呉揚明は自らが李常受の命を受けて被立王になったと称し、呼喊派の勢力を利用して密かに布教活動を行った。わずか数年の間に、被立王の信者は数万人にのぼり、安徽、湖北、湖南、江西、広東、広西、貴州、雲南、四川、黒竜江、内モンゴルなどの省、自治区に広がった。被立王の幹部は被立王一大権柄一代権人一服権人の序列で構成され、被立王は「父王」とも呼ばれ、十六人の「大権柄」（すべて女性）は教派内部の事務や呉の身の回りの世話をする。入信時期の早い人がつとめる「代権人」は布教活動に従事し、入信時期が比較的遅い「服権人」たちは教主や「代権人」たちに服従しなければならないとされた。一九九三年、呉は幹部らを集めて、江蘇省徐州市で第一回全国代表会議を開催し、一六名の「大権柄」を任命した。呉揚明は二〇〇〇年に世界の末日が到来すると言い、自分が世の中の王になることを宣言し、被立王を信ずるのが救済の唯一の道であると説いた。

その後、被立王教派は政府の取締の対象となり、呉揚明自身も警察に指名手配された。そのため、教派の集会は夜間に行われるようになった。集会は毎月一回開かれた。会場中央の机の上には、被立王の玉座を象徴する赤い布をかけられた椅子が置かれ、信者たちは教主呉揚明を礼拝し、呉が流行の歌に歌詞をつけた「聖歌」を歌い、呉に懺悔する。その後、幹部が布教活動の状況について報告し、呉の指示を仰ぐ。

呉揚明は「真の神の恩典を蒙って（神に）仕えなければ、魂のなかの不潔なものを取り除いて清潔な人間、真の天使になることはできない」と称し、複数の女性信者に性交渉を求めた。また、呉は信者たちに財産の十分の一を寄付するよう命じた。

一九九五年一月七日、被害を受けた女性信者の家族の通報により、呉揚明は安徽省蚌埠市で逮捕された。同年一月二七日、呉は強姦、詐欺の罪

で死刑判決を言い渡された。判決文によれば、呉揚明は布教の名の下に詐欺、恫喝、脅迫などの手段で十九人の女性を姦淫した（そのうちの一人に関しては未遂）。その行為は、すでに強姦の罪にあたり、情状はきわめて重大で、社会に甚だ大きな危害を与えた。死刑は一九九五年一月二九日に執行された。

### 3、主神教

主神教は「被立王」教派から派生した宗教結社である。その創設者である劉家国は一九六四年安徽省霍邱県に生まれた農民で、中学卒業後農業に従事し、結婚した後、一女をもうけた。一九八九年、劉は呉揚明の被立王教派に入り、その幹部となった。被立王教派が政府の取締対象となった後、劉は呉の命を受けて一九九一年年始に布教のために湖南へ赴き、湘郷、湘潭などの地域で活動し、一九九二年末までに数十人の信者を集めた。しかし、劉は布教の方針をめぐる呉揚明と意見が対立した。一九九三年初、劉は被立王教派から独立し、主神教を創立すると、自ら主神と称した。劉家国は自分が「イエス・キリストの肉身の二度目の生まれ変わり」であり、「正義、平和、神聖かつ純潔で、全知全能の生きた主神」だと称した。

主神教は主神、長老、在上主、四活物、七天使、省柄権、県柄権、同工の八つの異なるレベルの組織から構成された。二十四人の長老は主神に代わって権力を行使することができる。六人の「在上主」は全員女性で、長老がこれを兼任する。主神の身の世話をする四人の「四活物」、布教活動を行う七人の「天使」もすべて女性である。「省柄権」は一省に一～三名置かれ、省内の布教事務の責任を負う。「県柄権」は県レベルの布教事務の責任を負う（人数は不定）。「同工」は県と郷の二級に分かれ、各集会所の事務を行う。

主神教は家族、友人関係を通じて密かに布教活動を行った。布教は、特に若者の間で信者を増やすことに力を注ぎ、農村から都市へと勢力を広げた。主神教の主要幹部のうち九五パーセント以上が中年、青年で、そのうち六〇パーセントの人が中学卒業以上の学歴をもつ。劉家国は幹部を養成するために「十ヵ条の戒命」を定めた。その主な内容は、主神およびその代表である各レベルの幹部の命令に無条件に服従すること、個人の道徳、

## 基督の創出

品行を厳格に守ること、買春淫乱を禁止すること、違反者に対しては情状に応じて厳罰を処すること、である。しかし、「主神」劉家国の供述によれば、彼は少なくとも二十七人の女性信者と性的関係をもち、そのうち六人は妊娠して子供を出産したという。

主神教は「人間の国」を否定し、「主神」劉家国を中心とする「主の国」の建設を目標とし、そのために武器弾薬を購入し武装闘争の準備をした。一九九六年四月、十五の省から「主神教」の代表が湖南省衡山県、衡東県の二つの会場に集まって全国大会を開いた。劉家国はこの会議の開催は「一つの組織の出現を意味し、また一つの政権の出現をも意味する」と言い、一九九九年世界の末日の到来に備えて「主神を信ずれば病気のある人は病気が治り、無事息災になる」と述べた。

一九九八年六月、劉家国は雲南省曲靖市で逮捕された。一二月二日～五日、『北京晨報』『北京晚報』に掲載された長文では、主神教は「全国最大の邪教」と批判された。一九九九年六月、湖南省湘潭市地方裁判所は強姦、詐欺、邪教を利用して国家法律を破壊したなどの罪で劉家国に死刑判決を言い渡し、死刑は一〇月に執行された。

### 4、中華大陸行政執事站

呼喊派の活動が下火となった後も、安徽省蕭県の農民王永民は密かに布教活動を続けた。王は他の信者と意見が対立したため、一九九四年五月に自ら「中華大陸行政執事站」という教派を設立した。王永民自らが教派の「唯一の執事」となり、その下に「配搭」と呼ばれる四人の中堅幹部、十人の「執事」からなる「使徒」たちがいた。その下に「大教会片」もしくは「工作区」と呼ばれる教区が設けられ、「執事」がそれぞれの責任者となった。「大教会片」の下にはそれぞれいくつかの小さな教区が設けられ、それぞれの責任者は「家長」と呼ばれる。小さな教区の下には「排」という組織があり、それぞれの責任者は「同工」と呼ばれる。「排」の下にはいくつかの集会所が設置された。中華大陸行政執事站の五人の中心メンバーのうち四人が農民で、教育レベルは小学校卒業から高校卒業までである。

「被立王」教派と異なって、王永民は当時ロサンゼルスにいた李常受を「活基督」（活きたキリスト）と奉じ、「われわれは大陸で李常受にかしづくた

めの中心人物である」、「李常受は王である。天上と地下のあらゆる者は李常受という活基督に帰一する。これは阻むことのできない歴史的潮流だ」とする。

中華大陸行政執事局が中国政府によって活動を禁止された後、王永民は「われわれはこの世の陳勝、呉広、方蠟になろうとする。われわれは世の中の潮流に逆らう創業の精神をもっている」と述べ、共産党政権をサタン政権と批判した。一九九五年、王は逮捕された。

## 5、全範囲教会と华南教会

「全範囲教会」は一九八四年四月に河南省平頂山で創設されたキリスト教系宗教結社である。創設者徐永沢は河南省鎮平県の農民で、かつて呼喊派の活動に参加した。「全範囲教会」は「大きく、広く、深く」、世界中の救われたすべての人を含むことを意味する。集会の時に信者が大声で号泣することから、「哭派」、「哭重生（生まれ変わるために泣くこと）」とも呼ばれる。

「全範囲教会」は「教会基本改造草案」に基づいて、大声で号泣し、主に罪を懺悔しなければ生まれ変わることができないと説いた。徐永沢は十字架による救済、十字架道路、教会を建設すること、情報を提供することなど「七カ条の大綱」を制定した。また、各地で信者を育成するために七十回あまりの長期の、あるいは短期のセミナーを開催した。

「全範囲教会」の最高機構は「全範囲議会」で、県レベルには「牧区議会」、その下には郷村教会が設けられ、交通会、生命会、真理会、同工会などさまざまな形の集会が開かれた。交通会は教派内部の事務や人事を統轄する機構であり、ここで各地の代表が布教活動に関する意見を交換する。生命会は信者に教義を説明し、信者を訓練するための集会である。一回の会期は三日～七日で、信者は懺悔、祈禱しながら大声で号泣する。信者の目の前に白い光やキリスト、白衣を身にまとった人間が現れたら、その人は「生まれ変わった」という。この「生まれ変わった人」だけが参加出来るのが「真理会」である。真理会の会期も三日～七日で、出席者たちは聖書と「全範囲教会」の「七カ条の大綱」を学び、互いに感想を語り合う。これらの集会の参加者のなかから選ばれた信者が「同工会」に参加し、教派内部の

日常事務の管理に当たる。

「全範囲教会」は「三自」教会を批判し、「マルクスや毛沢東は中国を救うことができない。中国を救えるのはイエスだけである」と主張した。一九八八年までに、「全範囲教会」は河南省など九つの省、自治区で数万人の信者を擁した。一九八九年、政府によって「全範囲教会」の活動は禁止され、徐永沢自身にも収容、強制教育三年の刑が言い渡された。しかし、その後まもなく、「全範囲教会」は、再び活動を再開し、その勢力は十五の省、自治区に広がり、信者の数は数万人に増加した。徐は一九九一年に釈放されたが、その後も「全範囲教会」の活動を続けたため、一九九四年に有期懲役の判決を受けた。

一九八九年、「全範囲教会」の幹部龔聖亮は分会としての「華南教会」を設立し、一九九三年二月以降、「全範囲教会」の信者を吸収し、独自に活動するようになった。龔は議会、交通会、方会、聚会点の四つの異なるレベルの機構を設置し、厳しい紀律と逮捕された時に公安部門の尋問に対応する方法を含む「華南十三カ条」を定めた。そのなかに、救済とは天地を根本的に変えることで、「サタンと徹底的に戦い、サタンの国を崩壊させ、永遠の国を建設し、地上の国をすべてキリストの国にする」と書かれている。華南教会は一九九八年八月に雑誌『救贖と中国』（華南専刊）を創刊した。同誌は、計四十八号、約百万冊が発行された。

## 二、新教派の出現——いくつかの事例を通して

前述の異端結社のほかに、一九七〇年代末以降、聖書の断片的な内容と中国の民間宗教の教義に基づいたキリスト教系宗教結社が現れた。たとえば、「東方閃電（稲妻）」という結社の教主は鄧という名前の女性で、河南省鄭州市農村の出身である。「マタイ福音書」の「稲妻が東側から現れ、西側に照らすように、キリストの降臨も同じである」という文言を根拠に、自分が「東方閃電」すなわち二度目降臨したキリストであると称した。「東方閃電」教派は多くの女性を惹きつけ、十年足らずで中国大陸の十以上の省および香港、マカオ、北米にまで勢力を広げた。また、一九九四年一二月二八日、広西チワン族自治区の柳州で処刑された梁家業（一九五六年生まれ）は、かつて三年間強制労働をさせられ、釈放後「末日昇天」を説い

て、農村の信者たちを率いて長い旅を経て広州の白雲区に到達し、ここで「共産公社」を建設しようとした。

「基督の創造」をめぐるキリスト教系宗教結社の一連の動きは、呼喊派に遡ることができる。この類の結社はほかにもあるが、資料の制約で詳細な状況が不明である。以下では、霊霊教と門徒会の足跡を辿ることによって、中国大陸における外来のキリスト教系宗教結社の活動を見てみたい。

## 1、霊霊教

霊霊教の創設者華雪和は江蘇省淮陰県（現在淮安市淮陰区）漁溝郷の出身で、高校卒業後小学校の教師になった。一九七九年、華は蘇北民間で活動していたキリスト教「真耶蘇教会」に出会った。「真耶蘇教会」（もともとの名は「万国更正耶蘇真教会」）の創立者魏恩波は一八七七年河北省保定県に生まれ、一九〇四年に北京でキリスト教ロンドン会で洗礼を受けた。魏はまもなくキリスト教自立会に入ったが、除名された。一九一五年、魏は「基督復臨安息日会」の教義を受け入れ、翌年「使徒信心会」で洗礼を受けた。まもなく魏は自分が経営する絹織物の店で家庭集会を開くようになった。一九一七年四月三日、魏はキリストの顕現を見たと言い、自分の名をパウロに改めて布教活動を始めた。一九一八年二月、魏は北京で「万国更正耶蘇真教会」を設立し、自ら総監督となった。翌年魏が死去した後、息子の魏以撒が引き続き総監督をつとめた。一九二四年、「万国更正耶蘇真教会」は南北二つの派に分裂し、それぞれ独立した活動をするようになった。

商人出身の魏恩波は小さい頃から病弱で、心身の苦悩を取り除くためにいくつかのキリスト教教派に救いを求めた。このような個人的な経歴は、後に彼が各教派の教義を融合させて「万国更正耶蘇真教会」を設立する基礎となった。「万国更正耶蘇真教会」はキリストを唯一の神であると唱え、三位一体の説に反対し、キリスト教の「十誡」を守り、土曜日を安息日とし、聖餐式を行う。礼拝する時、信者たちは大声で祈祷し、聖歌を歌い、霊の舞踊を踊る。信者が洗礼を行う時は全身を水の中に浸し、キリストの名を唱える。魏は信者たちが「異言」で話すことを提唱し、薬を飲まず、祈祷することによって病を治すべきであると主張した。また、彼は外国の宣教

## 基督の創出

師を批判し、外国の資金で布教することに反対した。中華人民共和国成立後、「万国更正耶蘇真教会」は「三自教会」に吸収され、活動も下火になった。

前出の華雪和は「万国更正耶蘇真教会」に出会った後、一九八二年に「真耶蘇会淮陰弁事所（事務所）」を開設した。しかし、まもなく公安部門によって活動を禁止され、華自身も「万国更正耶蘇真教会」から除名された。一九八三年、華雪和は神の啓示を受けたと言い、霊霊教を創立した。彼は故郷に近い泗陽県でセミナーを開いて信者を訓練し、河南省で布教活動を行った。

霊霊教は、安息日を守り、霊歌を歌い、異言で話すなど「万国更正耶蘇真教会」の教義や儀式を部分的に受け継いだ。霊霊教の信者たちが歌った「霊歌」は、人民解放軍の兵士を讃えて歌う「十五の夜の月」や日本の「四季の歌」などその時の流行歌のメロディに宗教的な歌詞を入れたものがあった。霊霊教の信者たちの間では、「華雪和は『二次救世主』です。イエスの霊は彼の体に降臨した。彼を信じる人は救われ、永遠の命が得られる。『二次救世主』を信ずる者は天国に行き、信じない者は地獄に墮ちる」などの教説がなされ、華に対する個人崇拜が行われた。

霊霊教は厳密な組織がなく、「霊眼」（お祓いをして病を治す人）、「工程」（訪ねてきた信者を接待する人）、「作工」（伝道する人）と呼ばれるポストがおかれた。霊霊教の布教対象は主として信者の親戚や近隣に住む人々である。華雪和はセミナーを開催して各地からの信者を訓練、教育し、修了後彼らを各地に派遣して布教させた。一九九〇年、霊霊教は十数の省に約一万人の信者をもつ教派となった。霊霊教の急速な発展は公安部門の注意を引き、一九九〇年に、江蘇省で霊霊教に対する取締が始まった。華雪和は逮捕され、強制労働三年間の刑を受けた。刑期を終えて故郷に戻った華は霊霊教に対する意欲が薄れ、めったに集会に参加しなくなった。その代わりに、郭広学が霊霊教の元信者たちを集め、霊霊教から名を「復活道」に改め、布教活動を続けた。

郭広学は一九五九年河南省方城県の農家に生まれ、中学卒業後霊霊教の幹部となった。一九九四年、郭は刑期を終えて故郷に戻った華を二回訪ね、その訪問以降キリスト教の三位一体の教義を信ずるようになった。郭は、華雪和（父たる神）、自分（子なる神＝キリスト）、温秋会（聖霊）の三人

が新しい三位一体であると周囲の人に宣言した。温秋会も方城県出身の農民で、小学校を中退した後農業に従事した。郭広学は温の母親の病気を治すと言って温秋会母娘を復活道に入信させ、教派の本部を温の家においた。復活道の活動地域は河南省東部と西部の二つに分かれ、それぞれの教区にいくつかの布教の拠点があった。本部には守望（総責任者・郭広学）、柱石（教派事務担当・温秋会）、教牧（布教活動担当）、管家（財務管理担当）、治理（各種トラブルの解決）の五つのポストが設けられた。

復活道も霊霊教から独立した後、まもなくして政府取締の対象となった。一九九九年三月、郭広学は方城県で逮捕され、翌年二月、温秋会とともに詐欺罪と邪教を組織し、それを通じた破壊活動の実行という罪で起訴された。

## 2、門徒会

門徒会の創立者季三保は一九三七年陝西省安康地区の耀県の農民である。学歴は小学校卒業で、幼少から地元のキリスト教信者たちの集会に参加していた。季は一九七七年に洗礼を受けた後自宅に集会所を設立し、布教を始めた。彼は河南、湖北などでの布教活動を経て、故郷に教会を設立した。一九八九年旧暦一月一五日、季は隣県の農民許明潮らとともに家で集会を開いて、十二人の「門徒」を選出した。これらの十二人は門徒会の中心メンバーとなった。門徒会は総会の下に陝北、旬陽の二つの大会を設けた。季は総会責任者、許は陝北大会と旬陽大会の責任者となった。

信者の人数が増えるにつれ、門徒会の組織も拡大し、総会、大会の下に新たに分会、小会、小分会、教会、集会所が置かれ、七つの段階に分かれた。総会の下に七つの大会、大会の下に七つの分会、分会の下に七つの小会、小会の下に七つの小分会、小分会の下に七つの教会、教会の下に七つの集会所がそれぞれ属するという、いわゆる「七七制」の形をとった。大会と分会の責任者は七人で、小会は五人、小分会は四人、教会と集会所はそれぞれ三人であった。小分会以上の組織は延安時期共産党の「三三制」にならって、「主執」「配執」「慈管」と呼ばれる三人の責任者によって管理された。門徒会の組織はいわば自己完結的な宗教共同体と言えよう。

門徒会の章程は信者の婚姻、生活の救済を含む広汎なものである。辺鄙

## 基督の創出

な農村地域では、村民全員が門徒会に入信するところもあった。門徒会の信者は布教活動を行う「靈工」と村民の生活難を解決する「善工」の二つに分かれた。門徒会の教義には、「一人が（門徒会を）信ずれば一家全員が信ずるべし」と定められた。

門徒会設立後、短期間に信者の数が急激に増えた。安康地区では、わずか一年の間に、九つの県や市、五十一の区、二百五十四の郷、鎮、四百八十五の行政村で九百五十一の集会所が設立し、信者の数が三万七千人にのぼった。門徒会七百三十一名の幹部のうち、八十二人が村レベルの幹部であった。これらの郷村エリートの入信は門徒会の拡大につながった。一九九四年一月三日、重慶直轄市長壽県雲台鎮で開かれた「違法組織門徒会取締公判大会」で数人の門徒会幹部が判決を受けた。そのうちの一人「重慶分会執事」林長遠は、高校卒業後二十七年間村が経営する小学校の教師をつとめ、何度も優秀教師に選ばれたという経歴を持つ。なお、林は村民委员会主任、小学校共産党支部の委員にも選ばれていた。門徒会は共産党の基層政権に取って代わったと言っても過言ではない。

門徒会は政府の計画出産政策や地方政府による租税徴収に抵抗した。陝西省西康地区では、公安機構による門徒会取締の際に、門徒会信者が区や郷の人民政府を包囲し、幹部、警察と衝突する事件が起きた。旬陽県では、一九八九年二月から七月までの半年間、同類の事件が七十六件発生した。一九九〇年三月二四日、湖北省鄖陽県では、三千人の門徒会信者が県政府を包囲する事件が起き、双方に負傷者が出た。

これに対して、各地の政府は一九九〇年～一九九二年に門徒会の活動を禁止した。その結果、門徒会の活動は一時期停滞した。しかし、一九九四年以降、門徒会は再び活動を開始し、一九九五年には十四の省、三百あまりの県で門徒会の集会所が設立され、信者の数は数万人にのぼった。湖北省では、門徒会が一九八九年に活動を始め、一九九八年六月に厳しい弾圧を受けた。その後、公安県の門徒会「執事」趙成武が「第五教会」と称する基層組織を設立し、一九九九年九月に趙が逮捕されるまで活動が続いた。

### 3、越境する教派

中国社会内部から発生したキリスト教系宗教結社のほかに、改革・開放

後の中国では、海外に本部があるキリスト教異端結社——本文冒頭で述べたように、筆者はこれらを「越境する教派」と称する——も布教活動を行っている。越境教派は一般に規模が小さく、秘密に活動を行うため、社会に大きな影響を及ぼすには至っていない。唯一の例外は韓国から中国東北地域に伝わってきた異端教派である。これらの教派は中国東北の朝鮮族との人的つながりを通じて、異端教派の教義を宣伝する書籍やデジタル製品を中国国内に持ち込み、朝鮮族や漢民族の間に広まった。以下では、「達米宣教会」と「韓国以利亞教」を取り上げる。

「達米宣教会」は韓国で多くの信者を抱えるキリスト教の教派である。その教義によれば、一九九二年一〇月二八日に世界の末日が始まる。その時、復活したイエス・キリストが天空に現れ、敬虔な信者を天国へ連れて行く。残された者は七年間の苦難の歳月を経て一九九九年に末日の審判を受けざるをえない、という。「達米宣教会」の教主李長林は親戚訪問のために韓国を訪れた中国朝鮮族の人たちを対象に布教し、彼らに達米宣教会の宣伝品を中国に持ち帰らせ、中国の朝鮮族キリスト教信者の間に流布させた。一九九一年以降、達米宣教会は直接信者を中国に派遣し、旅行、ビジネスなどの名義で教義を宣伝し、沈陽、北京、上海などで支部を設立し、布教活動を行った。

達米宣教会は吉林省の朝鮮族住民の間で大きな影響を有した。「世界の末日」とされる一〇月二八日の前に、吉林省十三の市や県、三十三の郷鎮の千二百人の信者が集まって教派の「昇天」儀式に参加し、最長三ヶ月の集団生活を送った。昇天の日時が一〇月二八日から一〇月八日～一〇日の三日間に早まることが伝えられると、信者たちは熱狂した。梅河口市、輝南県などでは、信者が「昇天」の時に川やダムに飛び込むのを阻止するために、警察が出動した。しかし、結局「世界の末日」が訪れなかったことで、多くの信者が達米宣教会を離れた。

達米宣教会が中国で影響力を失った後、原始共産主義の生活様式を尊ぶ韓国の以利亞教が中国に伝わった。教主の朴嗚呼は自分が宇宙の唯一の皇上帝であると称し、「宇宙十誠天国」の成立を目指していると称した。この教派は黒竜江省伊蘭県で「沈陽歌柵地」を作った。四十数名の信者が一軒の教会と二軒の家からなる「沈陽歌柵地」で共同生活をし、「地上の天国」

## 基督の創出

にちなんでそれぞれ苗字を「天」に改め、教主を「親父（実の父）」あるいは「師父（親方）」と称し、男性年長者のことを「叔父」「祖父」、若者を「王子」と呼び、女性年長者を「天嬢（天上の伯母）」もしくは「公主（プリンセス）」と呼んだ。

以利亞教内部では、「処所長」と呼ばれる責任者の下に「農弟」がいて、信者を率いて農作業を行った。その下には財務を管理する「会計」がいて、最下級には「勇士」と呼ばれる人たちがいた。そのほかに、教派内部の風紀や安全を担当する「殺戮天使」もおかれた。

以利亞教の「処所長」単玉波は漢民族の女性で、一九六三年に黒竜江通河県に生まれた。学歴は中学卒業で、一九九五年に以利亞教に入った。単は一九九六年に布教活動を行ったために公安局に七日間拘留された。釈放された後も、単は布教を続け、二月に設立されたばかりの「沈陽歌柵地」の「処所長」となった。

「沈陽歌柵地」が所在する山林地はもともと営林場につとめた董貴軍とほかの二人の信者が請け負った荒れ山であった。教団が董貴軍に請負契約書を提出すように言ったが、董はこれを拒否した。五月、「処所長」単玉波は「殺戮天使」に董を拷問するよう命じた。五月三〇日、董は監禁先から脱出し、営林場に以利亞教を告発した。これをきっかけに、以利亞教の存在が明るみに出た。二〇〇〇年七月、黒竜江省伊蘭県公安局は以利亞教を取締、四十数名の信者をそれぞれの自宅に強制送還した。

### 三、連続と変化——初歩的な考察

以上、現代中国のキリスト教系異端結社の輪郭を描いた。これを通じて、キリスト教異端教派の原動力ともいえるある共通の要素——「基督の創出」——を読みとることができる。

周知のように、キリスト教はユダヤ教から派生した宗教である。ユダヤ教の教えの根本は信者と神との契約である。それによれば、信者が契約の内容を記載した律法を守れば、神の保護を受けることになる。それに対して、キリスト教は律法を守ることよりも、イエス・キリストに対する信仰を重視し、キリストが自らの死を通じて人類の原罪を負った、人間は神の唯一の子であるキリストを信ずれば救われる、と説いた。このように、キ

リスト教はユダヤ教における神との「契約」の内容を変更しただけではなく、救済の対象をユダヤ民族という特定の集団から全人類にまで拡大した。この意味で、キリストの出現は宗教革命の開始を意味する。

興味深いことに、現代中国のキリスト教系の教派は例外なく「基督の創出」から端を発した。教派の創立者たちはキリストが神の「唯一の子」であるというキリスト教の教義を改竄し、自分がキリストの化身であり、現世における救世主であると称した。たとえば、前出の門徒会の教主季三保は自分が「神が決めた基督」であると称した。霊霊教の教主華雪和は自分が「主基督」や「基督再生」であると称し、信者たちに華のことを「華救世主」と呼ばせ、華の誕生日をクリスマスの日にした。また、「被立王」も自分が「耶蘇の化身」と称した。これらの「創られた基督」たちは、自分が神聖な使命を履行しており、自分の出現は新しい時代の到来を意味すると揚言した。

では、なぜキリスト教の伝統の薄い中国で次々に「基督」が「誕生」したのであろうか。主神教教主劉家国の供述は一つのヒントを与えている。劉は自分が「主神」になった経緯について次のように述べている。

私は一九六四年安徽省霍城県閔鎮牌坊郷五村に生まれた農民である。家が貧しくて勉強もできなかったため、十三才から県城の教会に通うようになり、教会の支部の一つである城南教会で活動していた。私はとても活発で熱心だった。教会の人であれば劉家国のことを知らない人はいない（劉の顔には得意げな表情が表れた）。この教会には百人あまりの信者がいた。一九九一年に内部に紛争が起きたので、私は仕方なく県の教会に移った。

劉が語ったところによれば、彼は十三才の時から地元の教会に出入りするようになり、教会の活動に熱心だったため、教会の内部で名を知られる存在となった。地元教会の内紛をきっかけに、彼は神になる近道を探すようになった。劉はこう続ける。

ある日の朝、私が教会に行く途中、二人の若者が私の名前を訪ねてきて、××（キリスト——引用者）が復活したことを知っているかと聞いた。彼らは私に（被立）がすなわち××だと言った。私はその話を信じて、私を連れて××を探しにいくように頼んだ。私は入会して

## 基督の創出

もいと彼らに言って、(彼らと一緒に)安徽省の阜陽に行った。私はようやく日夜思いを寄せていた(被立王)に会った。しかし、(被立王)に会った時、私はびっくり仰天した。彼は生身の人間ではないか。その時、私は内心この人が(活基督=活きたキリスト)であるかどうか、かなり疑っていた。でも言わなかった。彼(被立王のこと)の話は教会で聞いた話と違って、少し道理に合っている。でも私は(彼が活基督であることを)ずっと疑っていた。彼はただ普通の人だった。

劉家国が語った自分と二十才ほど年上の「被立王」呉揚明との面会は興味深い。呉揚明は人生経験が豊富で見聞も広いが、入信時期は劉家国より遅かった。呉揚明の「少し道理に合って」いた説教を聞いても、劉家国はただちにこの人がすなわち「活基督」であることを信じられなかった。しかし、劉家国にとって、呉揚明は良き模範であった。劉は被立王教派に入ってから四年足らずで、呉揚明に倣って聖書の内容を断片的に取り上げ、自分が「主神」と称した。彼は獄中で次のように語った。「私はこれまでずっと自分が普通の人間だと思っている。ただほかの人に(主神)と見なされて、私もだんだんそれを受け入れたのだ」。しかし、実際に「主神」を作り出したのは他でもなく劉家国本人であった。

預言者はその預言を信じる人がいてはじめて預言者になれる。これまでに取り上げた教主たちが「活基督」になれたのは、それを信じる信者がいたからである。中国民間宗教の歴史を振り返れば、異端教派による「基督の創出」が民間宗教の「神造り」の伝統を受け継いだことが容易に察知できる。キリストの再臨と称することと〇〇神仏の再臨と称することとは、本質的に同じことである。被立王などの教派の信者たちは魂の救済のため、私財を教主に寄付した。教主はその金の大部分を奢侈な生活に費やし、また複数の女性信者と性的関係をもった。そのため、呉揚明ら数人の教主はいずれも詐欺、姦淫の罪で起訴された。素行の正しくない教主が信者の財産を騙し取り、女性信者を姦淫する。これは教主と信者の関係の基本的構図と見なされる。しかし、実際の教主と信者の関係は、それほど単純なものではない。

まず教主について見てみよう。本文で取り上げた数人の教主はいずれも教育のレベルが低く、キリスト教の教義に対する理解は一知半解に過ぎな

かった。しかし、彼らの豊富な人生経歴が宗教知識の欠乏を補った。彼らの年齢はだいたい四十歳前後で、若くとも三十五歳を超えていた。世故にたけていて、信者の生活環境を熟知した。教主たちはみな農民であったが農業には従事せずに、各地を歩き回って、一般の信者よりも見聞が広い。劉家国が初めて「被立王」に会った時、「被立王」の話しが「教会で聞いた話しと違って、少し道理に合っている」と思ったという。われわれは「被立王」の話の内容を知る術はないが、「少し道理に合っている」ところが教主たちが教主になった所以であることは想像に難くない。劉家国は「主神」になった後、信者たちに次のように述べている。

あなたがた、ご覧ください。今の世のなかは洪水やら旱魃やらで、豊作の年は全くない。災害がなくても、田圃に水がほしい時は雨が降らないし、稲の収穫で太陽がほしい時は雨が止まない。この世界はもうおしまいだ。末日が近づいたからこんなに乱れているのだ。(中略) 湖南に何人かの汚職官僚がいたのではないか。十数万、百万(元)の金を着服し収賄も受けていた。何人かが投獄されたが、何人かは牢屋から出てきた。政府の話しはもう誰も聞かない。役人たちは自分の話しどおりには振る舞わないし、やったことは話さない。人間の国なら必ずこうなるのだ。人間の国はまもなく滅びる。唯一世界を美しい未来に導くのは私が主宰する神の国だ。

この一節はまるで中国民間宗教の経典「嘆苦経」に記された信者たちが現世の苦難を逃れるために「老母」を呼んでいる光景を彷彿とさせる。現実を痛烈に批判する劉家国の話しは、政府公認の教会では耳にすることのできないものである。

一方、本文で取り上げた宗教教派の信者の多くは教育レベルが低く、辺鄙な農村や社会の底辺で生きる人たちである。信者のなかには、精神的に救われるために教主に従った者もいれば、現実の苦境から抜け出すことを願っていた者もいる。これらの異端結社は信仰に基づく生活共同体の建設を宣揚した。教派の創立者や幹部たちは農村の現実に応じて、農民のニーズに合った宗教教義や布教方法を用いて信者たちの宗教的情熱を喚起した。信者たちにとって、集会所は単なる信仰の場ではなく、家=共同体的な意味をもつ生活の場でもあった。そこで教主たちは信者たちの精神を慰

## 基督の創出

め、彼らの生活を指導する役割を演じたのである。

多くのキリスト教系異端教派の出現は、政府公認のキリスト教、仏教、道教の無力さを浮き彫りにした。中国では、例えば帝政時代における「四民／方外」の構図（「游於方外、不在四民之内」）においてであれ、あるいは近代における「科学／迷信」の二元対立の構図においてであれ、政府公認の宗教は民衆の生活世界からかけ離れた存在であった。これを背景に、異端教派が芽生え、活発に活動する空間を得たのだった。宗教を「一切左道異端、煽惑人民」と見なす認識パターンのなかで、中国の公権力は「法令が増える一方で盗賊も増える」というジレンマに付きまとわれている。

## 参考文献

- 1、姚民権、羅偉虹『中国基督教簡史』、宗教文化出版社、2000年11月。
- 2、社会問題研究叢書編輯委員会編『論邪教』、広西人民出版社、2001年1月。
- 3、蔣嘉森『毒瘤——当今中国形形色色的邪教組織』、群衆出版社、2001年6月。
- 4、孔祥涛『世界邪教問題與反邪教闘争』、広西人民出版社、2001年6月。
- 5、譚松林、孔思孟主編『反对邪教、保障人權』、群衆出版社、2001年6月。
- 6、社会問題研究叢書編輯委員会編『再論邪教』、広西人民出版社、2002年9月。
- 7、子平主編『大陸「邪教」内幕——異端宗教如何与中共争奪神州』、香港：夏菲爾出版有限公司、2003年8月。

本稿は筆者が2004年12月上海師範大学で開かれた「中国近代社会与秘密結社史国際学術討論会」での報告（「創造耶蘇——当代中国基督教異端結社素描」）に基づいたものである。

# 創造耶穌

——當代中國基督教異端結社素描

孫 江

20 世紀 70 年代末以降，隨著全能政治的衰退，長期沈潛不聞的基督教異端結社——“邪教”和“迷信團體”——重新獲得了發展空間。一些非知識份子出身、脫離農業生產勞動的農民教主(charisma)，以基督教義為號召，呼應主流話語之外人群的欲求，開啓了創造基督教新教派(sect)的活動。與此同時，國外一些基督教異端團體也秘密進入中國大陸傳教，構成了基督教異端結社的另一景觀。對於基督教異端結社的活動，地方政府一以貫之地依法進行取締和鎮壓，其中若干案例也以各種形式登載出來，從而使研究者獲致觀察當代基督教異端結社的重要文本(text)。本文通過對這些文本的分析，將當代民間基督教異端結社所呈現出來的表像歸結為二：第一、承襲歷史上的教派而發展出來的結社，如以呼喊派為背景的各種結社及其緒餘；第二、利用基督教《聖經》資源創立的各種新結社，以靈靈教和門徒會為代表，包括來自國外的越境教派(transnational sect)，後者以韓國異端教派的影響最大。這些基督教異端結社的活動雖然產生了一定的社會政治影響，但迄今尚未引起學界的足夠重視，在不少學者看來，這類“邪教”類結社僅僅屬於政治學研究的對象，與宗教問題無關。本文以耶穌形象的創造(invention of Jesus)為切入口，通過對不同結社的政治化的表述所進行的再表述，試圖從宗教社會學的角度揭示此起彼伏的基督教異端結社所呈現出的共同特徵。